

高・大・一般 漢字（草書）

加藤 東陽

十七帖（王羲之）
⑪



（故在）永興（居）

故より永興の居に在り（ずっと前から永興に住んでいます）
※永興＝現在の浙江省の地名

〈参考〉三井本



〈解説〉

今回は、「十七帖」のリズム（旋回運動）に注目しましょう。

「十七帖」は遅筆が基調であると言われており、運筆にその余裕が見てとれます。例えば、速度にのった筆が転折でさらに力を得て弾みをつけ、より豊かなリズムに乗って展開されてゆく過程などが、随所に見受けられます。

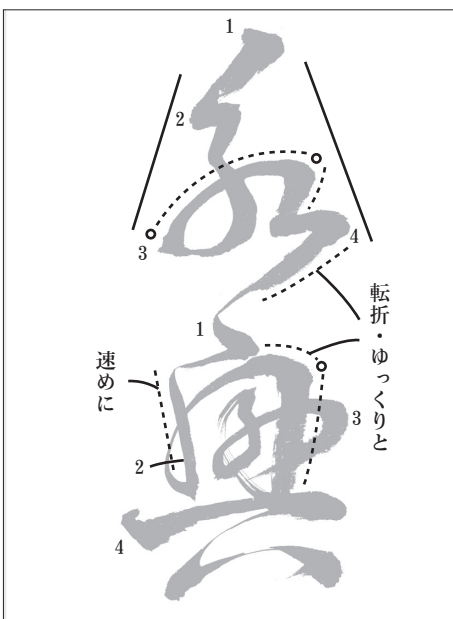
「遅」と「速」の運筆の方向をそれぞれよく見極めて、学習しましょう。

〈学習上の留意点〉

「永」：書き出しの左斜画（図の1）は斜めから力強く打ち込み転折（図の2）で筆に弾力をたくわえます。次への力と勢いが生まれるように運筆に抑揚と弾みをつけ図3・4に書き進めます。「転折の効用を活かす」ことが大切です。

「興」：線の太細（肥瘦）の差の強い書き方です。書き出し（図の1）は太いが、徐々に速筆にして細くなります（図の2）。その後、遅筆にして力を内にたくわえて（図の3）、左への払い出しを強く、横画（図の4）で全体のバランスをとります。

別掲の「三井本」も参考にしてください。



高・大・一般 漢字

新(10級から五段までは作品用紙として画仙紙ハツ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

杉崎 光波



〔釈文〕初出海涛疑尚濕 漸來雲路覺偏清

〔出典〕秦韜玉「八月十五夜同衛諫議看月」

〔読み〕初めて海涛より出で 尚お湿うかと

疑い 漸く雲路に來れば 偏に清
きを覚ゆ

〔意味〕海の波より出たときはまだ濡れている

かと疑われたか、漸く雲のあたりまで
上るとあくまでも清らか。

〔解説〕

清の劉熙載は、『芸概』の中で、「書は曲にして直体あり、直にして曲致あるを要す(書は曲でありながら直であり、また直でありながら曲であることが大切である)」と述べています。特に行草で書く際には、特徴を出そうとして曲線的にしすぎる傾向があるので注意が必要です。そこで今回は、敢えて細く直線的に書いて筋

骨(筋節)を意識しながら数ヶ所に曲線を配し、
各々の点画(線)には、筆圧と運筆の速度に伴
う太細の変化を加えました。
細い点画の文字を大きく書くと点画が拡散し
てみえます。紙面の天地左右の余白と字間の白
に注目して文字の大きさを定め、それぞれの文
字が「響き合う」ように収めましょう。

骨(筋節)を意識しながら数ヶ所に曲線を配し、
各々の点画(線)には、筆圧と運筆の速度に伴
う太細の変化を加えました。
細い点画の文字を大きく書くと点画が拡散し
てみえます。紙面の天地左右の余白と字間の白
に注目して文字の大きさを定め、それぞれの文
字が「響き合う」ように収めましょう。

漸	涛
平安 小野道風 屏風土代	明 王鐸
來	疑
唐 孫過庭 書譜	北宋 黃庭堅
覺	濕
北宋 米芾	明 王鐸

